私がサイゴンで得た印象は、イ た。それにくらべると、今回、

ンフレと政治の惰性にもかかわ

れたジャーナリストにも会った 判の論陣を張って投獄・釈放さ 近、リー・クワン・ユー政権批 うでありながら、また、依然と

ほどまでに多様であり、錯綜し

ていて、大きく流動しているよ

われる。もとより、個々の印象

して茫洋としているようにも関

を記すことは、いくらでもでき

William Committee of the Committee of th

とによって、すべての資料をコ

シアとはなにか、を改めて問わ

ピーすることができた。とくに

以上のような調査計画の一つと

ン川に沿ったボルネオ奥地の小 ルネオの密林を蛇行するレジャ ないわけにはゆかなかった。求

こは中国人街である 都市・シブやミリに行ってもそ

の直統便で帰国したばかりであ るが、今回の旅行の感想を記そ をおえ、一昨日、サイゴンから い。アジア諸国は、今日、それ うと思って筆を執ってみても、 一つの焦点がなかなか定まらな 三週間のアジア諸国訪問の旅 は、小野田さんの帰国といれち

伴って感じられた。フィリピン 気に充ちていて、街もきれいに らず、人びとの表情は明るく活 和平の意味がひとしお実在感を アオザイ姿が美しく、ベトナム なり、ベトナム娘のカラフルな り、「日本軍国主義」批判の御 だから、小野田さん事件につい 国主義」の亡霊として伝えてお ても、それをもっぱら「日本軍 紙は、いまも相変わらず、日本軍 国主義」批判の急先録である。 が、一方、シンガポールの範字 74. 10 To

> とも伝わっていないのである。 主義」批判をやめてしまったに っていない)中国が「日本軍国 さえも「人民日報」は一部も入 代表的な大学である南洋大学に ば、シンガポールの中国語系の

ところで、私の 今回の 旅行 わが国でもようやく昭和四

ヤ族(陸ダヤ族)の生活実態を

調査したのをはじめ、原住民ダ カン(同)などの都市の実態を コタキナバル(サバ州)、サンダ に渡り、クチン(サラワク州) して、ボルネオ島(マレーシア)

調査するために奥地に入った

ナム和平だ、やれ日中国交だ

き、やれ米中接近だ、やれベト

私たちは、アジアを見ると 

と、とかくグローバルなレベル

O-----X-----O

環境にかんする基礎的研究」の 大型の研究プロジェクト「国際 国際関係・国際政治にかんする 科学研究費(特定研定)による 十八年度から開始された文部省

査できたことも大きな収穫であ の反政府ゲリラ活動の状況を調 たが、ダヤ族をも含むサラワク り、最近、その潰滅が伝えられ

ジアを考えすぎてはいないだろ

での世界認識にのみ依拠してア

うか。もとより、こうしたグロ

バルな認識は不可欠だが、ア

よって、それぞれの国をそれぞ ベルで実態的に把握することに ジアの現実をそのローカルなし

らためて実感せざるを得なかっ 時そのままであり、街も人びと 間隔でかの地を訪れているが、 いてみてみると、私は一九七〇 惨と、この国の将来の困難をあ 訪れてみて、ベトナム戦争の悲 ときは、ダナン東北方の、主と の表情も暗く、埃っぽく、そし 七〇年当時は、どこを見ても触 年、七二年、七四年とほぼ二年 る。たとえば、南ベトナムにつ して山岳民族の難民キャンプを てあわただしかった。七二年の は興味深いことであった。 はこのニュースで沸いていて、 がいであったが、やはりマニラ とを知ったことも、私にとって のは、周波数の強い北京放送 の狂いがあったことを発見した 野田さんが、ジャングル生活の なかで数えてきた日月に五日間 していることが実感された。小 同時に対日感情もすっかり好転 シンガポールでは、つい最 (日本語)によるものだったと

ま伝達されないので(たとえ しいため、中国の論調は生のま してもらえない。言論統制が厳 本家であった中国が今日ではそ ことを伝えても、なかなか信用 のような批判をやめてしまった 国立図書館に二日間滞在するこ 的資料については、サイゴンの 島にかんするベトナム側の歴史 らず達成され、たとえば西沙群 大半は、短期の旅程にもかかわ たのであった。これらの目的の

華僑社会との関連についての調 アジアに拡がる「中国の影」と 研究代表者として私自身は、① て実施されたものであり、その 環としての海外学術調査とし オのどの都市にも、中国人がや った。だが、このようなボルネ さらながら難かざるを得なかっ ていることを現地に見て、いま はり圧倒的多数を成して居住し

語が通ずるのだから、言葉の不 出会ったが、ドラや太鼓の喧騒 は、たまたま中国人のお祭りに たのも事実である。クチンで なわけで、どこへ行っても中国 れるばかりであった。そのよう のなかを 出し物の 相次ぐその 「中国文化」の迫力には圧倒さ マ・ゲイシャ日本論と同根のも アジア論議は、だから、フジャ 立にかかわる問題なのである。 次元を異にする国家・民族の存 が社会の内面にピルト・インし の認識をぬきにして論じられる このようなローカルなレベルで は、わが国の場合とはまったく ない中国との国交樹立の問題 とえば依然として打開されてい ているマレーシアにとって、た 造を社会的宿命とし、中国問題 う。マレー人と中国人の複合機 達することはできないである かぎり、リアルなアジア認識に れ立体的・有機的にとらえない

中 問題の歴史的資料蒐集という三 の諸問題③西沙群島・南沙群島 査のアジアにおける中ツ対立

嶋 嶺 雄

つの目的をもって各国をまわっ

(東京外語大助教授)

自由はないものの、いったい、こ

のではなかろうか。

の国はどこの国なのか、マレー